
Que tenga usted mucha suerte.

美希マコト

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Que tengausted mucha suerte.

【Nコード】

N5392V

【作者名】

美希マコト

【あらすじ】

今日は何も無かった。そういう安定した1日が実は幸せだった事を俺はよく心得ていわけなので、日々をダラダラと過ごしている。これは大学生の特権でもあるわけなので、これからもダラダラと何物にも振り回されずにマイペースで頑張っていきたいと思う。

ところがどっこい！！コイツはたぶん俺の敵だ！！……もう、お家に帰りたい。

— Q u e t e n g a u s t e d m u c h a s u e r
t e .

.....

「ねえ」

「あ？」

「……呼んでみただけ、くふふ」

非常に気まずい場面というものは人生の中で数え切れないほど訪れると思う。しかし今、まさに今、俺はこれまでの人生で1番気まずい——というよりも、とにかくこの場から離れたい、逃げ出した

い。
話せば少し長くなるので、お茶とお菓子などを用意して楽な姿勢を取ってもらいたい。

実は……今、居酒屋でサークルの飲み会をやっていたわけなんだ（大学生だよ）。時間は既に午前1時を回ったところだ、つまり、2次会やらのタイミングになっていておかしくないわけなんだが、俺たちはまだ1件目の居酒屋に腰かけている。それもたった2人で、午後7時に始まったこの宴、カラオケ班は午後10時に出て行き、おしゃれ班（美男美女）は午後11時にバーに行くとかなんとか言い夜の街へ繰り出していった、そして残ったのがダラダラ班。その数なんと12人。選ばれし円卓の騎士達はダラダラと気の向くままに好きな物を注文し、飲んでは食べそして喋りというスローライフを楽しんでいたのだ。

しかし30分後の11時30分には終電が危ないと物申す輩が出

現した事により脱落者が相次いだ、24時の時点で選ばれし円卓の騎士は4人になっていた。

ただでさえダラダラしていたのに、4人にもなるとダラダラ具合は「だらんだらん」になり、会話は自然と減ってき――

「ねえねえ長いんだけど」

「つ――うるせーよ、入り込んでくるなよ」

「今日は水曜日か」

「もう、意味分かんねーから、ちよつと黙つとけよ」

くそつ、邪魔が入ったので、いろいろと省略するが――まあそんな感じで、24時30分あたりで2人帰ってしまいこの変な女と2人つきりになってしまった。

俺こと、埴輪のロンリーウルフ「歩兵と金」^{ほへいときん}↑ 埴輪に意味はない、浪速っばいだけ

向かいに座るピンクのヒラヒラを着こなす、電波ゆんゆん？「香^{きよ}車成香」^{うしやのりか}↑ 成香（なりきようと書いて、なりか）

コイツは苦手だ、非常に苦手な女だ。では次に、なぜそんな女と2人きりという状況になってしまったのかという話を――

「わつ、凄いよ！！お星さまだよーきらきらー」

「てめーホントに頭イカれてんじやねーの？それ蛸のから揚げだろ？どうやったたら星になるんだよ」

「星になれッ」

「おまえクスリでもキメてんじやねーのか、マジでヤバいぞ」

「あー、ちよつと小腹が空いたよねー……あつ、私これからしゃぶしゃぶ食べに行こうかな」

「ちよつ、てめえそれ分かって言ってるだろ！？」

「しまった！私これから張り込みに行かないといけないんだった
ヨ！牛乳とあんぱん買っていかなくちゃ」

「うおおおい！！アウトだろ、お前絶対理解して言ってるだろ！？」

「なんのことでしょ……私は女神よ！」

「……はあ」

話を戻そう……どこからだったけ？あーっと、うん、そう。以下回想。

………

「えっ、お前ら帰んの？」

「悪いね、深夜アニメ見ないといけないから帰るよ」

「アニメとか——ガキかよ」

「深夜アニメはオタクの義務だから」

「ある意味すげーな、憲法にでも追加してもらえよ……で、お前も帰るの？」

「あゝわたしいゝ、もうダメ！ダウндаウン、彼氏に迎えに来てもあうゝ」

「なんだ……萎えるな、じゃ俺も帰る——」

「ぐいぐい」

「おい、ちよつと離せよ」

「え！？話がしたいの！？もおゝ話す話す！！」

「いや、ちげーよ、馬鹿か。その手を離せつつってんの」

「じゃ、またなゝ」

「わらひもおゝ彼氏君来たからあゝ、んじゃれゝ」

「おい、ちよつと待てって！！俺も帰るから——手を離せよ！！」

「セヨー、手話すセヨー」

「死ね！！もう、お前は、ここの店出た先の交差点の真ん中で横になって轢かれて来い！！」

「もおつ、照れ屋なんだから。照れ1丁入りました」

「意味分かんねーから！！ほら、金出すから、これでお代払つとけ——俺帰るから」

「……知ってますか」

「んだよ、急にシリアスになりやがって」

「……わたしたち人類は、1999年7月に滅亡するんですよ」
「いつの話だよ、お前何時を生きてんだよ」

.....

こんな「逃げようとする↓しかしまわりこまれる」を永遠と繰り返しながら30分以上経って……今である。あまりにもしつこく意味不明な事を言うてくるもんだから、疲れてしまってまたちよつと腰をおろしているのが現在の状態である。

「くふふふ、うふふふ」

情緒不安定にもほどがあるこの不思議生物の面倒を1人で見るなんて、全知全能で無い限り不可能な話である。

「はッ！！」

一々反応していると命がいくつあっても足りないのではほとんどスルーしているが、たまに同じネタを連発してきてウザい。「いや、とつとと振り切つて帰れよ」と思うだろ？それが無理なんだよ、さつき腰を下ろしたと説明したが、まだ皆には情景が掴めていないのだと思う——見てくれ、この状態。俺は今動けないんだ

「頭が沸騰しそうだよ」

「おい、馬鹿、コラ！ その台詞はよせ、誤解を招くかもしれんだろ！？ 早く退け今すぐ俺の膝の上から離れろ！！」

ちなみにこの感覚でしか生きていない人型のなんか変な奴は、酔っ払ってはいないはずなんだ、最初からウーロンティーしか注文していない。

「ここでクイズです」

「（誰かに電話して助けを呼ぶか）」

「ここでクイズです」

「（えーっと、誰が暇してるかな）」

「クイズです、ここで」

「（あ、ダメだ留守電だ）」

「ここで、デスクイズ」

「殺されんのかよ！！」

「問題です。テレン（自前SE）」

「はいはい」

「早押しです、準備はいいですか？」

「はあゝはあゝ」

「それでは問題です……………わたしが今食べたいものは——なに？」

「（無視）」

「ピンポーン！——」

「おいこら、むやみに店員さん呼ぶんじゃねーよ！！」

「はい、お待たせいたしました」

「お姉さんをお持ち帰りで（キラッ）」

「どこのオヤジだよ——ほら見る、店員さんも困って——」

「きゃッ、こんな所で恥ずかしいです／＼」

「のっかなよ、面倒だろ」

「あははー——すみません、つい。で、ご注文は？」

「……あんばんを一つ」

「引ッ張らなくていいから」

気が付いたら午前2時になっていた、本当に帰りたい。どうやって言葉巧みにコイツをぎゃふんと言わつつ帰る事が出来るのか本気で考えなければならぬ時間帯だ。

「ぎゃふん!!」

「あ？」

「ちなみに今のはくしゃみです」

「なんの“ちなみに”なんだよ……え」

俺はちよつと違和感を感じた、というか随分前からどうもコイツに思考を盗撮されているような気がする。俺はサト。レだったのか……。

「ちみの思考がダダ漏れです」

「マジで!？」

ちよつと冗談だったのにマジだったのかよ、生き恥晒しまくりじやねーか。例えば、先週俺がこっそりAKC480の握手会に行ったのが皆にバレてるんじゃないか、そうなるとマズい、イメージジッて大事じゃん？俺が“そんな物”にうつつをぬかす——「そんな物とはなんだ!!」あ、いや、今のは……ちよつと自分で自分を盛り上げちまった。とにかく！イメージジッて大事じゃん？

「ちみっていう人は……やらしいんだね」

やべ、ちょっと俺今、動揺してしまった。こんなヤツに俺の本質を見抜かれていると考えると気持ちが悪いかいいうレベルを超えて富士山の五合目までも徒歩で行ってしまいそうだ。

「はあ、まったく困ったものだね。そんなに知りたいの?」

何を!?

「私、処女だけど何か質問ある?」

「えっ……は!?!」

唐突過ぎて一瞬、ホンの一瞬「え、マジで」とか思ってしまった。言い訳、言い訳は……あ、条件反射、そう!条件反射だよ!!だってコイツ見てくれは悪くないような……。

「おまわりさんこっちです」

訂正、全部訂正。何から何まで全部無かった。

「で、お前は本当に俺の思考が読めるのかい!?!」

なぜか敬語になってしまった自分を心の中でぶん殴った。

「うい。例えば、今さっきト金君は頭の中で私を犯したわ、それはもう激しく」

嘘だった。

.....

「お客様、ラストオーダーの時間ですが何か追加のご注文などございますでしょうか？」

もうそんな時間なわけで……結局俺はココから、いやコイツから逃げられずにいる。

「延長で」

「カラオケじゃねーから」

「えっ、ラブホのつもりだったんだけど」

「墓穴を掘ったな。これだから未経験者は」　そういう連絡は来ません、退室時間には気をつけようね。

「セクハラだわ」

「なんだと、てめ！今まで散々——」

「あのーお客様………」

………

「風が気持ちよかばい、ト金君もそう思っっちゃる？」

というわけで、ようやく解放かと思えば、まだコイツがいる。

「あかん、右肩脱臼したわ。韓国戦出られへん」

俺はトボトボと徒歩でとほほな気分で、まるで帰り道が分からずに途方にくれる子犬のような状態だ。（↑どんなだ）

「いやーもうすぐ日が昇るといっのにこの辺りはせせろしいねー、この雑沓はマジでよだきいなあ。あっ！あっちのおじさん見てみい、

むげねーなあ、ちょっとおじーわ……うわ、あそこの酔っ払い集団
しゃーしい」

もはや日本語かどうか怪しい。（日本語です）

「はわわ、はわわ」

個人的にだがこういう単純なのがどんな言葉達よりもイラッとする。

「はわわ、どうしよう終電逃してしまっているようです、はわわ」

今さらかよ。というツツコミもせずに勝手にズンズンと歩き続けた。早くコイツとおさらばしたいが……何かきっかけは無いものか。

「あつ、私ちよつとコンビニ行って漫画買ってくる」

——山が動いたッ！！

「じゃ、じゃあ俺帰つとくわー!!」

「あ、3秒だけ!!!3秒だけ待って!!」

しめしめ、俺はガチで3秒しか待たないぜ。これはもはやカウントダウンだ、0の瞬間に華麗なクラウチングスタートでロケットダッシュ決めてやるぜ。

「3」

まずは位置に着く。

「2」

ぐつと屈み、前方をにらむ。

「——1ッ!」

この攻撃的前傾姿勢は誰にも止められないぜ!!

「——ぜろおおおおおお」

「わ、ホントに待ってくれてたの!」

早過ぎんだろ。忍者かよ。

.....

「で、お前何買ったの?」

「エロ本」

「マジで!」

「きゃっ、変態ですわ」

「うざッ」

「本当はこれだよ、見たい!?!私の後ならいいよ」

ビニール袋から取り出されたのは、だるゝい感じの女子高生?が表紙の【ミーなんとかさん】という漫画だった。

「何それ」

「えっ、知らないの!?!今大人気なんだよ、アニメも絶賛放映中なんだよ」

「知らないんだけど」

「じゃあ見た方がいいよ、先に読んでいいから。そんなのだと社会に出た時恥ずかしい思いするよ、自国の大統領を知らないっ

て言ってるようなもんだよ」

「そんなに!!」

そこまで言われちゃしょうがないと思い、俺は道端でその単行本の1ページ目を開いた……どうやら4コマ漫画らしい。

……

【ミーなんとかさん】

「あのあの、わたし思っんですよー」

「うん」

「コーシーをブラックで飲んで「豆の味が」とか通ぶってる人見ると脳みそが痒くなってきました」

「うんうん」

「コーシーにはミルクと砂糖の絶妙な割合、いわゆるコーシーの黄金比があるわけですよー」

「うんうんうん」

「1:1:1:1だね」

「……ない」

【ミーなんとかさん2】

「あのあの、わたし思っんですよー」

「うん」

「スノーボードってあるじゃないですかー」

「うんうん」

「どうしてサマーボードってないんですか？私このネーミングの競技イケると思うんですよー」

「うんうんうん」

「夏だから、海で波に乗るの。それがサマーボード」

「……サーフィン」

とてもつまらなかった。

……

「こんなのが人気なのか？」

「もお、まだ2までしか読んでないでしょ？そんなの2打席で3割バッターを評価するようなもんじゃん」

【ミーなんとかさん3】

「あのあの、わたし思っんですよー」

「うん」

「土曜丑の日はウナギ押して文化あるじゃないですかー」

「うんうん」

「あれは夏にウナギが売れないから、無理やり売る為に昔の人が適当に作ったって聞いたんですよー」

「うんうんうん」

「だったらわたしも勝手に——」

「……サラダ記念日」

【ミーなんとかさん4】

「あのあの、わたし思っんですよー」

「うん」

「最近、モノクロック文化とポリクロニック文化って言葉が流行ってるじゃないですかー」

「……流行ってない」

凡打の山を築きあげた。

.....

「ボテボテの内野ゴロばかりのようだけど？」

「まあ、まだ4までしか読んでないじゃん。そう簡単にチャージングは取れないんだから——」

競技が変わっていた。

【ミーなんとかさん5】

「あのあの、わたし思っんですよー」

「うん」

「高校球児」坊主って馬鹿だと思っんですよー」

「言い過ぎ」

「あ、はい」

【ミーなんとかさん5・5】

「…………で？」
「ああ、うん。高校球児。坊主って少しおかしいと思うんですよー」
「うん」
「でも長髪OKの高校は絶対初戦敗退なんですよ」
「うんうん」
「若者にはもつと髪の毛に執着心をもってほしい、ある内に」
「うんうんうん」
「いつの日か坊主以外の優勝校が出ますように」
「…………出ますように」

【ミーなんとかさん6】

「あのあの、わたし思っんですよー」
「うん」
「外食でカレーをチョイスしちゃう人って人格疑っちゃいます」
「うーん」
「我が家で飽きるほど食べられるじゃん」
「う、うん」
「カレーの味とか誤差でしょ」
「違うよッ！！！！（だんッ）」
「へー？」
「…………ちよつとこっちに来い」
「へー？へー？」

【ミーなんとかさん7】

「カレー屋さんのカレーですか」
「うん」

「普通のカレーですか」
「うんうん」
「（一口ぱくり）」
「（ぱくり）」
「……（あ、美味しい）」
「……（ニヤッ）」

ハーフコートすら超えられないオフェンスが続いていた。

……

「どう、この切り裂くようなスピード感！！アリウープやノールックパスが炸裂し放題の無法地帯でしょ！？」

「どうやったらそこまで想像の翼を広げられるんだよ……」

俺はこの【ミーなんとかさん】の単行本を無言でヤツに返した。

……

「で、お前どこまで付いてくるわけ？そろそろ家に帰りつくわけだ……」

「どうかしてるぜ……！」

「お前がだよ」

というわけで家の前、街灯と自販機の明かりに言葉通り虫けら共が群がっている。

「じゃ、おやすみ——良い夏休みを……」

そろそろ疲れた、というか眠いので俺は特に余計な言葉を入れずあっさりテイストで告げ、ドアノブに手をかけ——ようとした。

「おい、離せ」

Tシャツの後ろの裾を引っ張りやがっているようで……。

「おい、もうさすがに俺は眠いんだよ……じゃ——うお!!」

だる〜んとしながらヤツを強引に振り切ろうとした時に何か凄まじい力に引っ張られた、まるで磁石に吸いつけられるような感覚だった。

「ほお〜ら、早く入って」

気が付くと立場が……いや、立ち位置が逆転していた。つまり、コイツは俺の裾を引っ張って俺を後方に投げ捨てたわけだ。

「ほらほら、そんな所で尻もち付いてると、餅つきが始まっちゃうぞ」

とりあえず、コイツは何が目的なんだろうか、なぜかそんな事が急に怖くなっただが、ひとまず言われるがまま(ていうか俺の家だ)玄関に足を踏み入れた。

「ハッピーバースデー!!!!!!」

パンツ!というクラッカーの騒音で耳キーン状態になった。そうか、これはサプライズパーティーというやつかと薄らこの物語の結末を予感してい——

「いや、待て。今日は俺の誕生日ではないぞ」

部屋に入ると……何もなかった。

「今のクラッカーの意味はなんだ？」

「えっ、気分」

「ハッピーバースデーの意味はなんだ？」

「……今日も世界のどこかで誰かが誕生日」

居酒屋で2人になってからか、気が付くと常にコノ変な人のペー
スだった。普段の何倍かの疲労を感じながら、俺は倒れるようにソ
ファで横になり、りんごを食べた白雪姫のように静かに眠りに入
ろうとしていった。

それにしても、なんだかんだで今日は——楽しかったような気がする。
する。

「白雪姫には目覚めの“ちっす”が必要ですネ」

「……………」

「では——接吻……！」

「……………」

「ちゅ……ん……！」

「……………Chu」

その瞬間、俺は、平穏な日常を放棄した。先の事は……良く考
えていない。

……………

——ご幸運を祈ります。

(後書き)

「電波ゆんゆん」というタイトル先行型で書き始めたはずが……
電波キャラって難しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5392v/>

Que tenga usted mucha suerte.

2011年10月8日23時30分発行